《翻訳》　モンゴルの宗教詩

# 老人と鳥

ダンザンラブジャー作

芝山　豊　　訳

翼(つばさ)得たる朋(とも)がらよ、夏の盛りの喜ばしき季(とき)に、

何故(なにゆえ)もって、遥かなる大海原より、雁音(かりがね)、羽音を響かせてこの地に至れるや。

古(いにしえ)の風の功徳に導かれ、四季の移ろいに従いて、

我ら夏の盛り、燃ゆる太陽(ひ)の下、はるばると美(うま)し湖(うみ)にたどり着きたり。

身を休め、思いのままに夏を過したるのち

秋には雁音(かりがね)に群れなして飛び去らんとするは何故(なにゆえ)ぞ。

聳ゆる木立の山々に、はや雲のかかりて、雪はちらつく、

この地、寒さまさんゆえ、我ら生まれ育ちし暖(ぬく)き故郷(さと)へ帰りなん。

汝が故郷の暖(ぬく)からば、

何故(なにゆえ)もって、故郷(さと)を飛び立ちて、

春再びこの地にいで来るぞ。

我ら翼ある鳥と生まれつき、
　苦楽いずれのあるかをわかたず、

　　見知らぬ土地を訪(おとぬ)るが運命(さだめ)なり。

求むる湖(うみ)に辿りつき、身を養い、睦む伴侶(いも)とめあいしに、

　散り散りに飛び去らんとするは何故(なにゆえ)ぞ。

この身は若く力あり、わが身は渡りせんとて選ばれたり。

　世のことの望みのままになるならば、御老体、御身(おんみ)は何故(なぜ)に老いられた。

この世に思いのままになることやある。

　汝、年寄りを揄(からこ)うか、誰かその問いにや、答え得る。

何条(なんじょう)無礼の言葉にて御身を悩ません。我ら御身の答えを乞い希う。

　御身は何故に老いられた。

老いを望んで老いたにあらず。
　この色界の倣いとて、この身に喜び悲しみをうけて、運命のままに老いたまで。

我らとるに足らざる鳥なれど、御老体、わが兄よ、

　我らが言葉(ことのは)、智慧もって観じたまえ。

遥かなる大海原の彼岸にて、甘き果実を口にして、

　歓喜のうちに再び相目見(まみ)えて、語らわん

御老体はこの地で健やかに。我ら翼得たる小さきものは　旅にあって健やかに。

あけたる春のその季(とき)に、再び相目見(あいまみ)えて語らわん。

諸神も人も隔てなく、全(まった)き徳の御仏の御門(みかど)にとく馳せ参じ、至福に歓喜せん。

## 訳者解説

作者はモンゴル文学史上特筆される文学者ダンザンラブジャー（Дулдуйтын Данзанравжаа; 1803—1856)である。短くラブジャー(Равжаа)と呼ばれることが多い。第5世ノヨン・ホトクトとして知られる高位の仏教僧、チベット仏教で徳ある高僧（ラマ）の転生者とされる活仏であった。現在のモンゴル国、ドルノ・コビ県、当時のトシェトハーン・アイマクのゴビ・メルゲン・ホショーの貧しい家庭に生まれ、幼くして母を失った。僧院に預けられた幼児期から卓越した文才を示し、1811年に転生者として認められ、その後、若くして名刹ハマリーン寺を創建した。後年、スターリン支配の 1930年代に宗教弾圧によって散逸するはずであった彼の遺物は、ある僧侶の機転で地下に埋められ、民主化後、発掘されている。現在、ハマリーン寺とラブジャーの博物館はドルノ・ゴビ県の貴重な観光資源となっている。

文学だけでなく、暦学や医学などにも精通していたラブジャーは布教活動の他、当時としては画期的な教育活動を行ったことでも知られている。彼の作った学校では、身分や性別によらず、子どもたちは誰でも読み書き（モンゴル語とチベット語）、歴史、算術や自然科学などを学ぶことができたと言われている。

文学者としては、数百編に及ぶ詩や歌を書き、また名高い歌劇『月郭公伝』の作者として著名である。

また、その著作は当時の聖俗権力者の奢りや不正を呵責なく批判したものとしてもよく知られている。『恥ずかしや、恥ずかしや』（Ичиг Ичиг）と題された詩の中では、「民を不公平に扱う領主」、「国を過てる官吏」、「患者のためを考えず報酬ばかりを気にする医者」などがやり玉にあがるが、「昼は寺でお勤め、夜は村をうろつく僧」、「修行はさっぱりで、盗み食いばかりする小坊主」など、堕落した仏教界への批判も忘れてはいない。

彼は篤実な宗教者でありながら、女性美を謳いあげた詩人としても高く評価されている。ラブジャーはダライ・ラマに代表される所謂黄帽、ゲルク派の顕教

優位の立場だけでなく、ミラレパに代表される所謂紅帽派に属する教派にも学んでおり、彼にとって、無上瑜伽タントラに基づく観想を通しての性的なエネルギーは肯定されるべきものであったためである。

モンゴル作家同盟の文学叢書のラブジャーの巻のタイトルともなっているYлэмжийн чанар（「完全なる品性」）はラブジャーの白ターラ（観音の化身としての女性菩薩、多羅菩薩、白度母）への観想に基づく作品とされている。この歌は、女性への賛歌、また祈願成就を祈る歌として、いまも人気が高い。

ここに訳出したӨвгөн шувуу も現在でもオルティン・ドー（長歌）としてよく歌われる作品である。

注目すべきことは、1960年代後半以降、冷戦下のモンゴル人民共和国で「老人と鳥」が高い評価を得ていたという事実である。社会主義時代には、仏教性を明示する最終聯こそ削除されていたが、封建領主や宗教の腐敗への批判という社会主義体制好みの作品ばかりでなく、この哲学的な内容をもつ詩がラブジャーの代表作として評価された。現代モンゴル文学のチェーホフとも呼ぶべき短編小説の名手S．エルデネはこの詩を巧みに引用した作品を残している。

しかし、激しいグローバル化の波に呑みこまれ、地下埋蔵資源開発に依存しMinegoliaとまで揶揄される現代のモンゴル国の若い世代にとって、深遠な意味をもつこの詩はもはや理解し難しいもののようである。老人と鳥の間で交わされる問答歌であるにも関わらず、この詩の題名を「老いた鳥」とする言説は昔から散見されたが、今日の若い世代の中には、名のみを知っているが、中味は知らないという人たちも多い。

少ない言葉数で深い意味を伝える詩は頭韻を踏む四行で構成される聯を並べるモンゴル伝統の韻律によって綴られている。小説と違い、詩の命は音の形式そのものに存するので、厳密に言えば翻訳は不可能である。敢えて、現代文を用いず訳出したのは、意味を伝えるだけではなく、詩であることを形で表現しようとする訳者の試みであるとご理解いただきたい。

「人は何故老いるのか？」と直截問いかけるこの詩の内容について解説しても、蛇足となるだけであろう。ここでは、上述の『恥ずかしや、恥ずかしや』の冒頭の3行を訳出して、読者諸賢の鑑賞の一助に供するにとどめたい。

恥ずかしや　恥ずかしや
善徳を積まずに　徒に老いたるもの

恥ずかしや　恥ずかしや
こころ正さず　新奇に身を窶(やつす)す若きもの

恥ずかしや　恥ずかしや
経典を己が生くる思想(こころ)とせざる物知り

テクストについて

本翻訳は旧モンゴル人民共和国モンゴル科学アカデミー言語文化研究所による *Монгол Ардын Аман Зохиолын Дээж Бичиг* (Улаанбаатар, 1967) тал 64 のキリル文字によるモンゴル語テクスト Өвгөн шувуу を底本とした。ただし、原書の明らかに誤植と思われる個所、社会主義時代に削除されていた聯については、モンゴル国モンゴル作家同盟による *Монголын уранзохиолын дээжис 41 боть Үлэмжийн чанар* (Улаанбаатар, 1998) 所収の Өвгөн шувуу хоёр を参照して補った。

なお、Charles R. Bawden *Mongolian Traditional Literature: An Anthology* （Kegan Paul, 2003）に掲げられた英訳 The Old Man and the Birds は *Монгол Ардын Аман Зохиолын Дээж Бичиг* とほぼ同じ内容であるが、15 聯の内容を含む他若干の異同がある。ただし、ボーデンは翻訳の出典底本を明記していない。